

「国際地域学」構築のためのひとつの問題提起

長 濱 元*

1. 国際地域学部創設の契機

昨年(1997)4月、東洋大学に「国際地域学部」が誕生し、そこに集まった教員(ファカルティー・メンバー)によって「国際地域学」の構築が目指されることとなった。

「国際地域学」という名称の既存の学問分野がまだ確立しているわけでもなく、またこのような名称の下に、新しい学問分野が構想されることが適当であるのかどうかについても定かではない。強いて言えば、「地域学」または「地域研究」という既存の学問領域のひとつの分枝として位置づけられると考えることもできる。

しかしながら、新学部としてひとつのまとまりを持った教育研究の場を確立し、今後予想される厳しい大学間競争の中で生き抜いていくためにも、それなりの学部の特色(カラー)が必要であり、教員集団としても教育研究にひとつの目標を持って研鑽に励むことは望ましく、かつ重要なことであろう。

その意味で、「国際地域学」という旗幟の下にどのような視点を設定していくことが必要かということに関する私案を提示し、問題提起としたい。

2. 世界は「国際化」から「地域際化」へ

まず、「地域」という言葉に注目してみよう。地理的な広がりという視点からこれを見ると、一方では「国家」という枠をはみ出すような広さを持った「地域」概念があり、他方ではいわゆる「片田舎」と言うか、「市町村」レベル以下の広がりしか持たない、狭い「地域」概念もある。我々の「国際地域学」はどちらに近い「地域」をイメージしたら良いのであろうか。このイメージ把握は「地域」に対する我々のひとつの「尺度」を規定することになる。

「広く解釈した方が良い」、「狭く解釈した方が良い」あるいは「どちらも含むのだ」という考え方もあるだろう。しかし、私はこのような「広さの尺度」を離れて、「世界中どこにでもある『地域』」という把握の視点を提案したい。

その理由は、これからの「地域研究」はこれまでもましてグローバルな視点を必要とするようになるからである。このことは当節ではごく当たり前のことではあるが、これまでの「地域研究」がどちらかと言えば「地域」の中に個別(特殊)性を見る方向に偏っていたのに対し、今

*東洋大学国際地域学部；Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

後はそれだけではなく「地域」の中に個別（特殊）性を超えてグローバルな共通（普遍）性を見だし、個別（特殊）性と共通（普遍）性とを秤に掛けて見るような比較考量を重視する研究の視点がよりいっそう要請されるようになると思われるからである。

今後の世界では、「国際化」、「グローバル化」、「ボーダーレス化」と呼ばれるような現象が、科学技術のいっそうの発展を伴いながら、国家経済や国際政治、あるいは多国籍企業のようなマクロな部門ばかりではなく、地方の小規模な地場産業や庶民・大衆の生活の場面においても浸透し、日常化していくであろう。そして、必ずしもハンチントンの言うような意味合いではないと考えるが、「文明」と「文化」の伝搬と相互浸透に伴う反作用としての衝突あるいは融合・妥協が大量に起こるであろうし、そのような動向の中で世界的な社会制度の調整も進んでいくことが予想される。すなわち、これからは世界各国の地方分権の進行の影響も受けて、「地域間交流」がますます盛んになり、またそのことが必要とされ、「地域際」問題がどんどん表面化してくる時代になるのではなかろうか。

私の予測に間違いがなければ、20世紀が「国際化」の時代であったとすれば、21世紀は「地域際化」の時代になるであろう。したがって、「国際地域学」はまさに世界の「地域際化」を研究する学問となることがふさわしいのではないだろうか。そうであれば、「地域」の把握の視点はやはり「世界中どこにでもある『地域』」が至当であると考えている。

3. 具体的な取り組み

前項で「世界中どこにでもある『地域』」という視点を提案したわけであるが、この視点は「広さ」、「量」等の尺度とは違って、「地域」の持つ質（内容）を比較し、測定することであり、それは必ずしも容易ではない。それでは、どのようにしてこの視点から「地域」を把握し、測定し、分析していけば良いのかという課題がさっそく出てくる。

ここで私の考え方を言えば、「地域」を物理（計量）的に測定する方法は従来採用されてきたどのような方法を採用してもかまわないのであり、そのこと自体には何の問題もない。問題はそのようなところにあるのではなく、物理的な測定も含めて以下の三つの問題を考えている。

第1には「地域内」分析と「地域間」分析とを質的にいかに結びつけていくかという問題がある。また、それぞれのファカルティ・メンバーの専門分野は異なっている。すなわち、この分野に手慣れた「国際地域学者」の集まりではないのだから、それぞれの専門分野間の連携をどのようにして進めていくかということが第2の問題であると考えている。

さらに、第3の問題は第1と第2の問題をどのようにして実現していくかということである。これは問題と言うよりは提案といった方が良いのであろうが、「学問に王道なし」という金言があるように私にも奇策はない。それぞれのファカルティ・メンバーが各自の研究に「世界中どこにでもある『地域』」という視点を取り込み、それを相互に提示し合って、意見交換を繰り返していく以外に方法はないであろう。ファカルティ研究会をできる限り多く開催し、その成果を「国際地域学研究」誌にどんどん掲載していくことである。

また、その際忘れてならないのは「学生」も仲間だということである。ファカルティ・メンバーは研究集団として「国際地域学」を構築していくと同時に、教育者集団として学生たちに「国際地域学」のイロハを伝達していかなければならない。学生も学部の構成員としてその意欲と満足感を充足していく権利を持っているのである。

4. 地域との交流と連携

「地域研究」を進めていくためには、研究対象である「地域」と深い関わりを維持していくことが不可欠である。そのためには大学が所在する地元はもとより、近隣の市町村、国内外の諸地域とできる限り多くの交流を図り、また、他大学との連携をも交えて当学部の教育研究水準の向上のための資源を拡大して、それらと共存共栄の道を歩んでいかねばならない。

それでは、そのために何を手がかりに、またどのような課題を持ってそれらを進めていけば良いのだろうか。まず第1には、地元・近隣の市町村との交流を図りつつ、それらが進めようとしている内外の地域との交流の手助けをしていくことであろう。すなわち、板倉町や両毛地域の市町村の他地域との交流・連携をアシストしていくということである。

第2は、東洋大学が主体的に行っている国際交流の枠組みの中で国際的な連携を強化していくことである。また第3は、ファカルティ・メンバーの各自が個人的に持っている交流・連携の機会を学部全体のために生かしていくことである。

これらを総合的にアレンジしながら、具体的な学部活動を活性化し、それらを学部の資産として蓄積していくことである。

5. イメージを掴むための具体例

ここで、以上述べてきた理念を具体化していくためのイメージが浮かんでくるようにふたつの例を紹介したい。

(1) 自分の地域とのそっくり度

国内において自地域と似通った地域を探すことはそれほど困難なことではない。しかし、国際化の時代にあって海外に自地域と「そっくり」な地域を探すことはそれほど簡単ではない。ここではある方法と共通の産業を通じてそのことに成功した岩手県大迫（おおはざま）町の例を紹介する。

岩手県大迫町は北上山脈の主峰早池峰山の山麓にあり、「神楽とワインの里」として町の発展を目指している。この町の主産業は「ワイン」と「酪農」であり、これらが町の主産業となった経緯も面白いが、ここではその話は割愛して、この大迫町がオーストリアのベルンドルフという町と姉妹関係となり、当時町長であった村田さんが初めてベルンドルフの町を訪ねて得た印象が私の「世界中どこにでもある『地域』」という着想にピッタリと感じたので紹介する気になったものである。

大迫町が外国の町と姉妹都市の提携をしようと思いついたのは昭和37年のことで、長崎市や横浜市などの国際的な大都市以外にはまだこのような発想がなかった時代だった。

村田元町長の談によると、「早池峰に咲くエーデルワイス(ハヤチネ・ウスユキソウ)は、ヨーロッ

パのアルプス文化の象徴でもあるエーデルワイスと兄弟の花だ」ということを思いついたことから、特に深い考えもなく何かの役に立つこともあるのではと、東京のオーストリア大使館を訪ねて大使に姉妹都市探しをお願いしたそうである。3年後に外務省を通じてベルンドルフに決まったという連絡が入り、姉妹都市としての関係が始まったのだそうだ。

大迫町ではちょうどこの頃、すなわち昭和37年にワイン作りの仮免許を得てワイン作りを始め、40年に永久免許が下りた頃であった。そして、昭和42年に初めて村田元町長がベルンドルフの町を訪ねたときに神々に捧げるワインの儀式でもてなされたという。また、ベルンドルフのフォークソング（民謡）のグループが歌ったり、町の人々が大きなワイングラスでいわゆる回り盃をしたりして気炎を上げたりしているのを見て、「なんだ、大迫と『そっくり』同じではないか」と思ったというのである。

大迫町でも「神楽の里」と称しているように神様を祀ってお酒（どぶろく）を献じて歌い踊っている。「どぶろく」の源は「サル酒」であり、されは「ワイン」の元祖そのものである。大迫町とベルンドルフは「エーデルワイス」だけではなく、「神を祀ること」、「酒（ワイン）を作ること」、「歌って踊ること」など、すなわち基底的な「生活文化」という観点で非常に近い（「そっくり」な）関係にあることがこの時発見されたのである。

姉妹都市関係が結ばれるという手続きは「外交ルート」を通ずるという大変「お堅い方法」だったのだが、結果的には当事者によってそれがすばらしい関係であるということが「発見」されることによって、その後の両町の姉妹関係は着実に発展しているであろうことが予想できる。最近では国際的な姉妹都市関係は珍しいことではないが、このように「なんだ、われわれと『そっくり』ではないか」という相互認識が基礎にあること、生活文化の基盤を意識の上で共有できることが重要であり、そのような「特定の地域」はあちこちにけっこう存在しているのではないかと思う。このことは「世界中どこにでもある『地域』」の1側面である。

(2) 「科学」を親子と地域関係の柱に

茨城県総和町は、古河市を挟んで板倉町とはごく近い位置にある人口4万7千人余りの農業と工業団地の町である。現在この町で「科学」を町興しの柱にしようという運動（試み）が始まっている。何故「科学」が町興しのターゲットになっているのか。その理由は決して単純ではなく、かなり複合的な条件が重なり合っている。

町（村）興しは「一村一品運動」に代表されるように多くの市町村が取り組んでおり、類似のターゲットを追求しているケースも多く、競合することも多い。したがって、単にユニークなだけでなく、その町の環境と気質を健全な発展の方向へ導くものでなければならない。

総和町の地場産業は前述のとおり農業と誘致企業を中心とする工業団地であるが、特別な特産品や大企業があるわけではなく、このままで将来も発展を続けるという状況にはない。「文化」を売り物にしようとしても、隣接する古河市の歴史的な「文化水準」にはとうていかなわない。いわゆる「産業」や「文化」を町興しの柱にしても「目玉」がないという状況が続いていたのである。

このような中で、平成4年にたまたま同町の西牛ケ谷小学校のPTA会長に長浜音一さんという元音響技術者であった農家のご主人が就任することになった。当時の同校PTAはごくふつうのPTAであり、母親中心で特に活発な活動もしていなかったそうであるが、長浜さんはそんなPTAをなんとか活性化しようとした。そのため、父親をPTA活動に参加させるための方策をめぐらした。その最も大きな目標は地域における青少年の健全育成ということであったが、その中のひとつが「おやじの会」の結成であり、幾つかの活動メニューの中から「父子の科学遊び・実験開発」というターゲットが成長してきたのである。

ちょうどこの頃は、全国的に「青少年の理科（科学）離れ」を防止しようとする動きが始め、国の「科学技術創造立国」を目指す政策の追い風もあって、「国民の科学技術への理解と普及」を目的とするさまざまな活動が盛んになってきた時期にあたっていた。「青少年のための科学の祭典」が広がり始め、大学、研究所、企業の工場などが開放され、さまざまな科学のイベントなども盛んに行われるようになってきていた。

長浜さんたちは、その中でも代表的な存在であり、東京の北の丸公園の科学技術館を根拠地とする「ガリレオ工房」のメンバーと交流するなどにより、多くの実験などを学び、自分たちでも新しい実験メニューを工夫・開発して「父子活動」を中心とする科学活動を地域に定着させていった。

長浜さんがPTA会長を退いた後も「PTA おやじの会」のメンバーは新たに同地域に「科学クラブ」を結成して科学活動を継続的に続けた。そして、その実績が次第に外部に認められるようになり、マスコミにも取り上げられるようになったために、町内の小学校等だけではなく、近隣市町村の小学校や社会教育施設、あるいは遠隔地の市町村からも「お呼び」がかかるようになった。また、毎年東京の科学技術館で開催される「青少年のための科学の祭典」全国大会にも常連として参加するようになった。

平成8年には、長浜さんがPTA会長時代の活動をまとめた論文が「読売科学賞」に入選するとともに、「科学クラブ」の活動は全国レベルのマスコミにも取り上げられるようになり、その評価も高まってきたのである。

このような展開の中で、科学活動を西牛ケ谷地域だけに止めておくのではなく、総和町全体に広げていこうという動きが出てきた。PTA、おやじ、学校が一体となって総和町に新しい活性化の芽を伸ばしていこうとする動きである。

総和町においても他市町村と同様に多くの文化活動やスポーツ活動が盛んであり、学校クラブ活動としてもスポーツやブラスバンドなどで県大会や関東地区大会に進出するなどけっこう活発な活動が行われている。必ずしも「科学」にこだわることはないとも言えるが、総和町と教育委員会は「科学」に目を付けることにしたのである。そして、平成9年9月には全町的なボランティア活動を目指す「総和おもしろ科学の会」が結成された。

総和町の町興しは長浜さんたちが始めたボランティア活動としての草の根運動と、町当局の新しい行政方針とが「科学」と「子どもたちの健全育成（人材育成）」という視点から結びつき新しいタイプの地域活動として動き出しているところに特長がある。そして、その視点は単に総和町だけの

視点ではなく、「科学活動」、「創造性の育成」という普遍的な視点を通じて国レベルの「教育改革」を先取りし、「国際交流」を通じて将来は全国や全世界へ「総和町の理念と活動」を発信していこうという目標も掲げており、非常にユニークなモデルを提供する試みであると言える。

6. まとめ

以上、私の考えに参考になると思われる事例として、地域の自然環境や地場産業に密接に結びついた生活文化の中に「普遍性」を見いだすという観点の事例と、今や高度な産業社会を築き上げる原動力として、地域の枠を超えて広がり人間の創造的な活動を促進する「科学」という「普遍性」に着目した地域興しに取り組むというふたつの地域開発の事例を紹介した。これらの事例はそのターゲットは異なるが、どこかでそれぞれ「人間性」の開発につながるテーマを選んでいるというところに共通性を見いだすことができる。

「世界中どこにでもある『地域』を「国際地域学」構築の視点とするということは、どこの地域にも何か「普遍性」が顕在的にあるいは潜在的に存在していることを前提とすることであり、それを明確にしていくことであろう。そのためにわれわれはできうる限り地域に入っていくことが必要であり、われわれが「地域」の人々の生活を研究対象としてしっかりと「見据える」ことである。そのことは同時に彼らによって我々もしっかりと「見据えられる」ということを意味する。そのような相互の緊張関係が「国際地域学」の中に『魂』を吹き込み、当学部を支えるバイタリティになると考える。そしてその『魂』はやはり「人間性」によって支えられていかなければならないと思うのである。

これからの「大学冬の時代」に「暖かいマント」を無償で提供してくれる人は少ない。近隣や世界中の地域としっかりした「ギブ・アンド・テイク」の関係を結ぶことによって、「暖かいマント」を自ら紡ぎ、機織っていかなれば生き残っていけないであろう。その第一歩として、まず足下（地元）の地域との連携において何ができるかをしっかりと見据えることから始めるのが良いと考える。

謝辞：この文を記すにあたって、岩手県大迫町の事例については（財）政策科学研究所発行（平成10年9月）、「21世紀フォーラム」第66号 p32～39、「神楽とワインの里」（日本の村研究会）を引用させていただいた。また、茨城県総和町の事例については、中山隼雄科学技術文化振興財団の研究助成を受けて実施している、著者を研究代表者とする「地域に定着した親子で楽しむ『科学遊び』の開発と運営に関する研究」の成果の一部を紹介したものである。この場を借りて、関係者の方々にお礼を申し上げたい。

An Aspect of Regional Development Studies

Hajime Nagahama

The author presents a concept “‘Region’ as commonplace in the world” to make sure the central concept for regional development studies of the Faculty of Regional Development Studies, Toyo University.

He also introduces two cases of Japanese local towns. One is Ohazama-machi, Iwate prefecture, which is developing through wine brewing and daily farming and co-operate with Berndorf Town, Austria as a sister city. Ohazama-machi discovered a exactly similar town like her natural environment, local industries and peoples' culture and behavior in her local area after looking over the world.

Another one is Sowa-machi, Ibaragi prefecture, which is a ordinary type of Japanese local town in agriculture and small indurtry area. Recent years, this town is tackling with developing of regional activities and education of youth through permeation of scientific activities (science shows, scientific experiments and handi-crafts). The source of this movement is a voluntary group which was composed by several fathers of pupils of Nishi Ushigaya Primary School in this town. This town is now becoming famons in Japan through a view point of creativity of scientific activities.

The author discusses the uniqness and universality of region as the object of regional development studies through those cases and his concept “‘region’ as commonplace in the world”.